

## 「教学・教化専門委員会」中間報告

文責 田澤 一明

### <はじめに>

今年度の教学・教化専門委員会では、内局から提起のあった以下の二課題を調査研究の課題とすることにした。

- ① 教師の資格及び育成について
- ② 組を基軸とした教化活動の展開について

しかしながら、いずれも教団にとって重要課題であり内容も多岐にわたるため、両方を話し合うことは時間的に困難と判断し、委員会を二つの分科会に分け、それぞれが一つの課題を担当することとした。

以下は分科会Bにおける課題②「組を基軸とした教化活動の展開について」の中間報告である。

### <組を基軸とした教化活動の展開について>

#### (1) 「共同教化」の意味

同朋会運動は、当初から「共同教化」ということが課題とされてきた。2012年5月にまとめられた『同朋会運動の推進計画』によれば、「共同教化」の概念は以下の二つに要約される。

- ① 複数寺院の協力による教化活動（具体的には組）
- ② 僧侶・門徒の協力による教化活動

今回のテーマである「組を基軸とした教化活動の展開」ということに関して言えば、上記の①に重点が置かれるように思える。激変する社会状況の変化により、寺院の護持経営上の不安や一カ寺での教化活動の困難さが増す中で、複数寺院や組の協力のあり方は十分検討されなければならないし、課題も多い。

しかし一方で、同朋会運動の当初の願い、宗憲の精神に立ち返って「共同教化」を考えれば、むしろ重点は②にあると言うべきであろう。僧侶と門徒の壁を越えて、御同朋として共に学ぶ場を生み出していくことこそが、「共同教化」の名のもとに願われていることの根底にある。

したがって、上記の二つの課題は並列的にあるのではなく、重層的にあるとみるべきだろう。なぜなら①の「複数寺院の教化活動」がなされても、②の「僧侶、門徒の協力による教化活動」が推進されていることにはならず、かえって阻害する可能性もあるからである。

## (2) 検討の視点

長年「共同教化」の重要性が言われ続けているにもかかわらず、それが進展しないばかりか停滞状況にあるという認識は、衆目の一致するところであろう。今回の「組を基軸とした教化活動の展開について」というテーマも、その認識に基づいていると思われる。

「組」の課題は、教化の問題のみならず、制度機構・財政・再編の問題など複雑多岐にわたる。そのため、その検討にあたっては多くの視点が考えられる。

今回は先の②の視点、すなわち「僧侶・門徒の協力による教化活動」という視点に立って検討したい。つまり僧俗の壁、あるいは男女・幼少の壁を乗り越えて共に参画し学ぶことがどこまで成しえたのか、成しえなかったのか。成しえなかったとすればどこに原因があるのか。成しえるために何が必要か、ということをも具体的に提起できればと考えている。

そしてこの視点は、「同朋社会の顕現」「同朋公議」を標榜する教団に在っては、「組」のみならず「寺」「教区」「教団」の教化活動を点検総括し展開を検討する際に決定的に重要な視点でもある。